http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.338　14/03/19

デジタルネイティブとたまご落としコンテスト

星陵セミナーで思い出したことがあるので２つの話題について書いてみよう。星陵セミナーと直接関係することではないのだが、学問（大学）の現在を知る上で面白いなぁと私が感じた話題である。

＊

今日のセミナーにも文化人類学の講座が用意されているが、もともと文化人類学は西洋が非西洋の異文化を知るために生み出された学問だった。つまり、異文化理解がその根本にあるわけだが、異文化理解といえば、例えば、現代のネットワーク上の仮想空間である「サイバースペース」などは、まさに人類にとっての新たな社会文化的活動空間といえるわけで、文化人類学の研究対象となる。

その一つの例として、この空間に幼少時から関わっている「デジタルネイティブ」（1980年前後生まれ以降の世代）を対象に、それ以前のアナログ住民と、どのようにコミュニケーションや人間関係に対する考え方や行動様式が異なるのかを調査研究する学問分野が生まれているのである。

文化人類学とサイバースペースではまったく異なる学問分野のように思えるが、アマゾン流域でフィールドワークをしているようなイメージの学問の世界でも、新しい発想から新しい成果が生まれようとしている。学問は本当におもしろい。　(参考文献：『デジタルネイティブ』木村忠正、平凡社新書）

＊

20年以上続く「たまご落としコンテスト」を知っているだろうか。東京大学先端科学技術研究センター教授の生田幸士先生は、医用ロボット、医用マイクロマシンという新分野を切り拓いたことで知られる学者だが、創造性教育の分野でもユニークな取り組みを続けていらっしゃる。その一つがこの「たまご落としコンテスト」なのである。

地上30メートルからたまごを落として無事かどうかを競うわけだが、当然そのまま落としたのでは割れてしまう。地上30メートルといえばビルの10階に相当する。

そこで生田先生は、コンテスト参加者にＢ５版のケント紙と木工用ボンドだけを渡すのである。この材料だけを使ってたまごを守る仕組みを考えようというわけだ。さて、どんな発想が浮かぶだろう？（ちなみにこの通信はＡ４版だから、Ｂ５版はもう一回り小さい紙ということになる）

2013年の秋には、東大１年生43名が挑戦して８名が成功させ、先端研の公開日に参加した約150名の一般人の方々の場合は、約１割が成功、小学生も含まれていたそうだ。

工夫のアプローチとしては、①落下速度を小さくする　②着地の衝撃を減らす　③両者を組み合わせる　④発想を転換する　といった方向性があるそうだが、さて、イイアイディアは浮かんだろうか？

＊

大学では実に多様な学問・研究がなされている。本当に自分の好きなことがあれば、それを追求していく道が必ずあるに違いない。志望の大学に合格して、そんな道を探す旅に出掛けようではないか！　（東京大学広報誌「淡青」2014年３月号を参照）